

修二会における祈りと咒

平岡昇修

東大寺修二会における咒師による咒師作法は、法会において密教的な側面を司り、法会に害をなす魔や穢れが会場に侵入するのを防ぎ、護法善神などを勧請するなどして、法会を無事成就させることを、その役割とする。すなわち咒師作法は魔障・悪魔を払うものとして認識されていた。二月末日の夕方に行われる大中臣祓は、法会を行うに当たり最初に罪や穢れを祓うと同時に魔を祓う意味があると考えられる。修二会期間中に穢れが生じた場合には咒師が祓を行うのである。大中臣祓は、別名「天狗寄せ」ともいわれている。護法神である天狗を法会に先立って勧請する儀礼であり、天狗とは、法会に害をなす存在で、罪や穢れの象徴とも捉えられている。「天狗寄せ」の由来については、法会に害をなす天狗を祓う儀礼、天狗に守護してもらうための儀礼、という両義的な意味・解釈がある。ここにおいて特徴的なのは、密教に基づく作法を行った後に「袈裟威儀を返す」として和布袈裟を左肩から外して右肩にかける点にある。この作法は、祓が神事であるために、僧侶を象徴する袈裟を外し神官となることを意味する。晨朝の勤行を終えて参籠宿所に戻る際、練行衆は口々に「ちよーず、ちよーず(手水、手水)」と叫びながら下るのは、練行衆が宿所へ下っている間に、法会に害をなす天狗や魔が侵入して悪さをしないように、「少し、手水に行くだけだ」と言って、天狗や魔を騙すのであ

る。その所作は、印を結んで、呪を唱え、金剛鈴を振り、須弥壇の周囲をめぐるなどである。初夜や後夜の咒師作法では、軍多利明王や五帝龍王を念じた水で会場を浄め、大地や四方を結界し、四天王を勧請した後、上方を結界する。咒師作法の前段階の貝や鈴などの音は、神々を驚覚させる呪力を持つという。呪師自結界は、呪禁の修法を成就させるために、まず呪師自身が透徹した身心を持たねばならないからである。大金剛輪印明・不動結界印明・護身法印明・香呂供印明・燈呂供印明は、修法を行う呪師自身の、けがれを払い除き、悪魔をしりぞけ、所願達成せんがための作法である。啓白は、道場で十一面悔過の法会を勤修する旨を述べ、修法によって道場からすべての悪魔鬼神が退散し、護法の善神が道場を守護してくれるようにと申し述べる。「啓白」までが呪師の勧請の作法である。

香水加持では、軍荼利明王・五大竜王などを念じて、酒水器の香水を加持して、その清浄な霊力を増さしめ、加持した香水で、内陣を清めて回る。

修法の第二は結界行道の「前結界」では、地結呪で道場の下方を結界し、四方結呪で四圍を結界する。結界した道場に、四王勧請で道場の四方鎮護の四神を勧請する。西正面で、東方の持国天を勧請し、北正面で、南方の増長天を勧請し、東正面で、西方の広目天を勧請し、南正面で、北方の多聞天を勧請する。勧請の作法の後、後結界の作法を行う。善神の来臨を仰いだので、上方結界で道場の上方も結界してしまう。密縫の印明で手落ちなく隅々まで結界し、最後に本尊十一面の印明で念を入れる。

呪師は、法会の場に魔障の侵入するのを防ぎ、護法善神を勧請するなどして、法会を円満に成就させるために修法を行う事を職務とする。呪師は、「水取り」を行い、「走り」、「達陀」を宰領し、結願の際に行われる作法である「灌頂護摩」、結願の「神供」等、神道的・密教的諸作法も、呪師が勤める。

死者と協同する仏教は可能か

坂井 祐 円

日本仏教の霊的次元における社会貢献を考える上で、葬式仏教の問題は無視することができない。とはいえ、葬式仏教はこれまで、仏教の類落した形であるとされ、とかく厳しい批判に曝されてきたのも確かである。

葬式仏教への批判は、仏教が葬式に関わることの是非を問うよりも、関わる意味が明確ではないことに向けられるべきであろう。葬式に関わらないのが本来の仏教だ、という論法では、依然として、教理としての仏教（理念）と習俗としての仏教（社会的現実）との溝は埋まらない。むしろ、仏教が葬式に関わる根拠を、仏教の思想構造の中に見出し、葬式を仏教的にどう意味づけるかを課題としなければならない。

その際、一つの示唆を与えてくれるのが、京都学派の田辺元が提示した「死者との実存協同」の思想である。「実存協同」とは、絶対無が愛となつて、実存的主体を生きる人間にはたつき、その人間を媒介として、他の人間に対して覚醒のリレーシ

ョンを起こすことを指す。この覚醒のリレーションが、死者と生者との間に起こるとするのが、「死者との実存協同」である。それは次のような展開をもつ。絶対無即愛のはたつきが死者を媒介にして、生者へと振り向けられることで、生者に覚醒がもたらされ、さらに、覚醒した生者は、今度は自身が媒介となつて絶対無即愛のはたつきを他者に振り向けていく。

「死者との実存協同」は、日本仏教のコンテクストに即して言えば、死者によつて生者が回向供養される、という構図を表していることになろう。これは、死者に向けて回向供養する、という従来の日本仏教が捉えてきた死者供養の構図とは、対照的である。

日本仏教の死者供養には、死者を安楽にさせる、成仏させる、という大義名分があった。それは、迷いの中にある死者を、仏の世界と結びつける、という意味をもっていたわけであるが、その内実は、遺された生者が漠然と抱く死者に対する畏怖や脅威を解消するために、回向供養の考え方が利用されてきたとも言える。つまり、死者に向けられた供養というのは、生死を超えるという仏教本来の課題を死者の側に明け渡してしまふために、遺された生者に内省を促していく力を弱めてしまふ、という問題点を抱えているのである。

死者によつて生者が回向供養されるという構図には、この問題を克服して、死者の供養を通して生者の覚醒がもたらされる、という根本転換がはかられているのである。

とはいえ、一方で、この構図は、生者への焦点化が強調されるために、結局は、死別悲嘆を癒すグリーフケアの考え方を死